



この二年間を回顧して

会長 北川 正 保

二月二十四日山王日枝神社に於ける、第六十回神宮式年遷宮記念

「東京都氏子青年大会」で、若さ溢れる熱気を肌を感じながら、昨年八月神青氏青共に手をたずさえて、あの伊勢の地に於いてお白石持奉仕を終えた事がまさまざと目に浮んで来た。一昨年六月大田区千束八幡神社(恵良彰紀宮司)に於いて、昨年十月には台東区小野照崎神社(小野亮哉宮司)に於いて、今年三月には品川区品川神社(小泉和夫宮司)に於いて、それぞれ単位神社氏青会が結成された事は衆知の如くであるが、これ等は皆我々の大先輩が成し得た事であり、ただ頭が下る思いがし、我々若手会員もがんばらなければと

痛感しておるところです。

もうすでに何回となく我々の間で論議されて来た問題ではあります。が、今後神道青年会の教化事業の重点施策を考えるにあたり、我々が取り組み易く、我々でなければ成し得ないものは何かという事を見極める時ではないだろうか。その様な考えにもとずいて思うに、我々と同年配の仲間としての氏青づくり。これは青年神職として最も取り組み易く、しかも必ず成功する方法であると思えます。青年神職の自己研鑽の場として会員の中に発題者をもとめて教養講座を行い、毎回熱心な発言と論議がつくされて来たが、参加者がかぎられていた観があった。テー

マの好き嫌いはともかく、こういう機会には卒先して出席し、お互いに練磨し合ってこそ光が出るのである。この点今後の問題として反省している所であります。雅楽講習会も行なわれ、その成果として定期総会に、氏青大会にとその堂々たる演奏を聞かせてくれた。これは二年間のたゆまない努力の結果であると思えます。

一昨年十月小笠原大神山神社再建に際し、我々青年会員も滝部長と共に青年会代表という重責を負って御復興に奉仕した。その折のさまざまな出来事は素晴らしい思い出として心に焼きついています。この奉仕活動を通して、石川県神道青年会との交歓、北多摩神青の「むらさき会」との親交をはかる事が出来たのも大きな成果であったろう。

第一テーマではお白石持奉仕、昨年七月の神宮神域の清掃奉仕、NET題名のない音楽会の出演奉仕とそれぞれ意義深く行うことが出来たが、それも担当の松本副会長熱意のたまものだと思います。第二テーマは過去二年間にわたり団地内の緑の神域を訪ねて西へ飛び、又「過密過疎化した都会に

昭和四十八年度
東京都神道青年会
定例総会

時 昭和四十九年四月十七日
午後四時

所 東京都神社庁 会議室

次第

- 一 開会の辞
- 一 神宮遙拝
- 一 国歌斉唱
- 一 敬神生活の綱領唱和
- 一 会長挨拶
- 一 来賓挨拶
- 一 議 事
- 1 決算報告
- 2 会務報告
- 3 役員改選(会長選出)
- 一 新会長挨拶
- 一 閉会の辞

於ける神社と氏子とのつながりについて」の課題のもとに区内全神社宮に対し、アンケートを求めた所、色々な波紋を投げかけはしたであろうが、回収率の予想以上に高かった事、感謝申し上げる次第であります。担当の大鳥居副会長の努力であると共に、この解答された資料をもとに更に前進させた

いものである。

「やくわえ」も年二回の定期会報の他に、小笠原特集号並びに不定期会報一号二号と、それぞれ広報が発行された。

各種会合には新しい議長職を立派にこなし、会議の運営を円滑に行った山本君に心から拍手を送りたいと思う。

八木前名会長の跡を引継ぎ、其の精神で有る自己研鑽と教化を真柱としての二年間、無我夢中であつたという間に過ぎ去つたような、非常に長かつた様な複雑な気持ちであります。まがりなりにも大過なくやつてこられたのは各方面のご協力と先輩諸兄の後ろ立てと役員の方力によるものである事はいうまでもありませんが、特に委員の一人一人の熱心さに支えられて来たと申しても過言ではないと思ひます。この事は二年間を通して、会長としての大きな喜びであつたと同時に、更に新しいエネルギー源となつて来たのであります。更に役員改選後の新体制のもとにこの熱意をお互いに育てあい、しっかりと手をつなぎ合い、斯道のためにつくつてももらいたいと思ひます。

会 務 報 告

四月九日

役員会。於・雪ヶ谷八幡神社。

四月二十日

委員会。於・神社庁。

四月二十四日

東京都氏子青年連絡会に出席。

於・道道橋八幡神社。

四月二十五日

会計監査会。於・神社庁。

五月九日

總會準備会。於・神田神社。

五月十一日

定時總會。講演「現代青年に思う」。講師八田一郎氏。本会役員による雅楽「越天楽」「皇靈急」演奏。於・神社庁。

五月十三日

「沖繩復帰一周年奉告祭」に八木・森田両役員が参列。於・沖繩県波照間。

五月十四日

神道青年全国協議会役員会に出席。於・神社本庁。

五月十五日

「日本を考ふる会」に二十五名が出席。於・都市センター。

五月十五日

「沖繩復帰一周年記念祝賀会」

に十二名が出席。於・ホテル・オークラ。

五月二十四日

役員会。於・神社庁。

五月二十九日

神道青年全国協議会役員会に出席。於・神社本庁。

五月三十日

神道青年全国協議会総会に出席。新会長に戸内康雅氏(福岡県)就任。於・神社本庁。

六月八日

委員会。於・神社庁。

六月十五日

「国学院大学九十周年事業」に関する話し合い。神社庁役員と於・神田神社。

六月二十日

懇親旅行会。於・鬼怒川温泉ホテル。

六月二十三日

「殉国沖繩学徒顕彰二十八年祭」に参列。於・靖国神社。

六月二十五日

教養講座「神道教化の問題点」於・神社庁。

六月二十六日

「神社庁例大祭」に祭員並びに伶人を奉仕。於・神社庁。

七月六日

東京都氏子青年連絡会に出席。於・貴船神社。

七月九日

「国学院大学九十周年事業」に関する話し合い。大学、本庁、神社庁等関係者と。於・国学院大学。

七月十三日

教養講座、前回に続き「特に死の問題」を中心として。於・神社庁。

七月十三日

「日本を考ふる研究会」に出席。於・国立教育会館。

七月十九・二十日

みそぎ修練会。於・武州御嶽山教養講座「教化問題について」

七月二十五日

「お白石洗い」行事——神域清掃に奉仕。於・伊勢神宮。

七月二十七日

第一回「神青協創立二十五周年記念実行委員会」に出席。於・神社本庁。

七月三十一日

「第十五回東京都神道人野球大会」に参加。九年ぶりの優勝。

於・神宮外苑球場。

八月七日

「懇親ドライブ会」。日光二荒山神社参拜。

八月十八日

「お白石持ち」行事に一日神領民として奉仕。於・伊勢神宮。

八月十九日

全国氏子青年大会に出席。於・京都国際会館。

八月三十日

役員会・委員会。

先輩との懇親会。於・大宮八幡宮。

九月七日

テレビ「題名のない音楽会」にお白石持ち姿で出演。於・渋谷公会堂。

九月十九日

「神青協創立二十五周年記念実行委員会」に出席。於・神社本庁。

九月二十日

「やくわえ」不定期便を創刊。

九月二十五日

「第一回一都七県神社庁親善野球大会」に参加。東神チームは三位。於・茅ヶ崎市営球場。

九月二十六・七日

神道青年全国協議会役員研修会

に出席。於・那須。

十月六日

役員会・委員会。於・神社庁。

十月九日

小委員会。於・神田神社。

十月十二日

はぜ釣り大会。於・馬入川。

十月十四日

小委員会。於・熊野神社。

十月二十三日
小委員会。於・神社庁。

十月二十六日

第六回ボウリング大会。於・湯島ホワイトボウル。

十月三十一日

東京都氏子青年連絡会に出席。於・氷川神社。

十一月五日

小笠原大神山神社大祭奉仕に松本・滝岡役員が出向。

十一月十九日

役員会・委員会。於・神社庁。

十一月二十六日

神道青年全国協議会役員会に出席。於・神社本庁。

第一回「伊勢神宮式年遷宮記念東京都氏子青年大会実行委員会」を開く。於・神社庁。

十二月五日

忘年会。於・熱海「暖海荘」。

十二月八日

東京都氏子青年連絡会忘年会。於・日枝神社。

十二月十二日

委員会。於・神社庁。

四十九年一月十二日

新年会。於・神田神社。

「やくわえ」不定期便第二号を発行。

一月十六日

「伊勢神宮二年遷宮記念東京都氏子青年大会実行委員会」を開く。於・神社庁。

一月二十一日

教養講座開催。テーマ「青年神職はいかにあるべきか」。於・神社庁。

二月九日

委員会。於・神社庁。

二月十三日

「国旗掲揚推進運動」として街頭でマツチを配布。於・渋谷駅

二月十八・十九日

「伊勢神宮式年遷宮記念東京都氏子青年大会実行委員会」を開く。於・日枝神社。

神道青年全国協議会中央研修会

に出席。於・寒川神社。

二月二十三日

「伊勢神宮式年遷宮記念東京都氏子青年大会」の準備。於・日枝神社。

二月二十四日

「伊勢神宮式年遷宮記念東京都氏子青年大会」開催。於・日枝神社。

三月八日

役員会・委員会。於・神社庁。

三月九日

「伊勢神宮式年遷宮記念東京都氏子青年大会実行委員会」の反省会。於・神田神社。

三月十五日

教養講座開催。テーマ「青年神職はいかにあるべきか(続)」。

於・神社庁。

三月二十二日

第七回ボウリング大会。於・後楽園ボウリング場。

三月三十日

祭式講習会。於・国学院大学。

三月三十一日

「やくわえ」七号・八号(第二テーマ報告・附録)発行。

毎週木曜日

雅楽講習会。小野雅楽会指導。

於・神社庁。

ひとと

御遷宮

山内 渡

大御心のもとに、神宮の式年遷宮が昨秋めでたく斉行せられた事は、まことに慶びに堪えません。この上は我が日本の前途に寄与せん事を会員諸兄と共に誓うものがあります。

遷御の御儀を一ヶ月余後にひかえた八月十八日、我々は本年度事業方針の主眼ともなるお白石持ち行事を神領民と共に奉仕した。まだ暑さきびしい中、伊勢は遷御の御儀に参加する慶びにあふれ、二十年目の大儀が間近に迫りつつあることが感じられた。

神宮に詣でる者はその幽すいな境内に踏み入っただけで、思わず襟をただすと言うが、内院の奥深く木の香も新しく金銅の飾り金具や五色の居玉輝く御正殿の間近に参入し、白木のまぶしさに堪え、堅魚木を仰いだ。そして御敷地に

鳴りわたる白石を撒く音に、あの潮騒のようなど表現される拍手の響きを聞き、かたじけなさを実感した。

お白石奉獻が終ると御正殿の御門は堅く閉ざされ、二十年後の御遷宮までは何人といえども参入できない。それはまさに千載一遇の神機であった。

そして冷えきった十月二日の深夜、浄闇の中を静かな参道は続き日本の生命はよみがえった。

人々は語った。神宮は「日本人のあり方、お互いの生活のあり方」というものの基礎を教えてくれている」、「日本の風土で育った日本人の心の産物であるので、自覚を超えて、今の若い人達にも心の本質に復帰した共感を呼ぶ」として「この共感が、安らぎという自然的で抵抗なき心情を生む」。

「神宮こそは日本民族の生命のもとであり、生命というものは永遠不滅のものであり、それをどう生かし、どう受け継いだらよいかを示しているのが神宮である」と。

かくて日本民族の誇るべき文化は次の世代へと引継がれた。そして、第六十一回の御遷宮がこれまでのように行われるべく、我々青年神職はその責務の重さを自覚し神道の精神を生活の根源に置く日本人を育成するために、挙げて邁進する決意を持たねばならない。

青年会に思う

守谷 幸夫

今期の青年会のテーマ「第六十回伊勢神宮式年遷宮奉賛活動」及び「過密過疎化した都会に於ける神社と、氏子とのつながりについて」の二つは、多大なる好成績を上げたことは、会員として大変嬉しく思いました。又東京都氏子青年大会も盛大な内に終り、まだ氏青をもたぬ御社もこれを契機に氏青結成に乗り出されることと存じます。

このように外に對しての青年会の歩みは着実に前進をしている様ですが、これからの青年会々員となる学生に對しては、何ら手をもさしのべられてはいない様です。今青年会で行っている「国学院

大学創立九十周年記念事業」に對する要望も、着々と実績をあげていることと存じます。しかし大学がいかに設備的に充実しようとして、中にいる学生にその気がない様では、何ら青年会の努力も水泡に帰することになると思います。故に大学ばかりでなく、青年会は学生に對して青年会とはどの様なものか、どの様な活動をするものなのかと言うことを知ってもらふことにより、学生生活を充実させ、又卒業後は故郷の御社あるいは各地へ奉職と言うことになっても、各地の青年会において活躍されることと思ひます。

この様に学生が在京中に青年会組織を知ることが、各地の青年会組織を強化させ、又各地の青年会をより強く結束させるものと思ひます。

現在でも青年会々員ではあるが青年会は何をしているのだ？との声を多く聞くことがあります。このようなことが起こらない為にも青年会活動を知ってもらふ必要があり、活動をより全国的にしていくなにも、神道学科学生を導くことが、青年会の基礎固めになるものと思ひます。

この二年間を ふり返り

倉光賢一

今回広報部に配属されて早や二年が過ぎた。振り返って見るに色々思い出される。小生いまだかつて広報関係の仕事は初めてであり、神尾広報部長指導のもとに行なわれた。原稿依頼してより取りまとめ、不なれなる割付け、校正とあり一つの広報に関してよくもまあこんなに沢山の仕事があるものと今も関心している。だが一つの機関誌なり便りとなって活字化された時の喜びは大なるものがある。神青会には各担当担当の仕事が分担され、事業が遂行されているが、どの部門に於いても皆同じ事が言えるであろう。

小生委員会、種々の会合には立地条件も手伝いあまり出席率の良くない方である。機会ある毎に出席し、みんなの不断の生活、都心及び大なる神社の実態、下町のお社の生き方色々聞く事も出来、
「人」どのふれ合いも多く、参考になる所が沢山あるが、何かいつ出席しても同じ様な顔ぶれで、ま

だまだ多くの会員の方が居られるのにと思ふ時がしばしばある。小生も委員となり三年生の若輩者であるが、初めの頃は言葉を交わす人も少なく不安に思いつつ現在に至った。これより新年度となり新会員の人達も多く加入されると思ふが、誰もが気兼ねなく話し合える大きな「場」そして神社界に芽をふく若きエネルギー源となる事を希望する一人であります。

最後に広報部二年を無事努められた事を喜び、先輩諸氏並びに、会員各位の今後尚一層の御教導を切にお願い申し上げます。

雑感

千村義和

広報部の委員として二年間、先輩諸兄に御指導を賜わり、勉強させていただきました。感謝申し上げます。

あまり一生懸命にやりましたとは言えませんが、この仕事を通じてたくさんの方の意見を聞き、またレポートや論文を熟読しました。会員諸兄が平素から神社を真剣に考えていることがひしひしと感じら

れ、自分の不勉強、力不足をいやというほど思いました。

会員の中には「神青会は一体どんなことをやっているのだ」という意見を持つている人が多くいるようです。末端の会員にまでゆきわたるような活動をするのが課題であることは確かです。と同時に、私は「君らはどうして神青の教養講座やレクリエーションに出てこないのだ」と言いたい。

神社神道と宗教の問題については、神社界としての結論は出ています。地鎮祭判決に対する神社本庁の見解はその一例です。しかし神主が宗教家の範ちゅうを外れることに疑問を抱いている人は、私を含めて多いようです。明治時代の神社神道、戦争直前の神社神道が二千年以上の歴史の中でどういうに位置あるのか、このあたりを勉強することが、自分の結論を求め一方法であると最近考えています。

これからは純粋な戦後の教育を受けた人が、社会での地位を固めていきます。唯物的な物の見方に対して反発できる確固たる考えを持つことこれがこれからの時代に最も大切であると私は思います。



今年の春はそこまで来ていて、仲々やっつてはこない。暖かい日が出て、もう大丈夫だと思ふと翌日は非常に寒かったりして……。

したがって、この頃ちらほらと耳にする各地の桜便りも不安定でいつ見ごろになることやら見当もつかない。

こんな話を肴にして一杯やりながらわれわれはこの「やくわえ」第八号の編集をやっている。

早いもので我々が東京都神道青年会機関紙「やくわえ」を担当してから、もう二年を経過しようとしている。とても満足のいくものではなかったが、定期会報・不定期便ともにどうにか発行が出来、役目を果せることが出来たことを会員各位に感謝致します(神尾)

昭和四十九年三月三十一日
東京都神道青年会
東京都港区元赤坂二―二―三
東京都本社庁内
電話(408)二三六一・九二七七